



1929-2016
NH HARNONCOURT
ETERNAL COLLECTION

アーノンクール

エターナル・コレクション

(1枚組) ¥1,400(本体)+税 (2枚組) ¥2,300(本体)+税 (3枚組) ¥3,100(本体)+税 (4枚組) ¥3,800(本体)+税

ひとつの歴史を築いた巨匠指揮者ニコラウス・アーノンクール。
彼の素晴らしい遺産を代表する、彼の転機となった多くの名演奏、
現在入手しにくいアイテムを厳選し、日本独自企画にて再発売。
日本語解説・歌詞対訳付。オリジナル・ジャケット・デザイン使用。



ワーナーミュージック・ジャパン
オフィシャル・ホームページ / クラシック

<http://wmg.jp/cla/>



WARNER
MUSIC
JAPAN

HARNONCOURT ETERNAL COLLECTION

「アーノンクール後の世界」を生きるために

ニコラウス・アーノンクールが世を去って一年、その不在の大きさは、耳と感性と心ある人々にとって、ますます自明のものとなっているはずだ。その大きさは、喪失感以上に充溢感によって実感される。パトリツィア・コパツィンスカヤがテオドール・クルレンツィスと組んだ、曲のイメージを刷新するチャイコフスキー。そのクルレンツィスが発表した超演劇的で無数の問いかけに満ちたモーツァルトのダ・ポンテ・オペラ三部作。あるいはブルックナー、R.シュトラウス、ブラームスと、時代と作曲家に応じて鮮やかにスタイルを切り替えてみせるパーヴォ・ヤルヴィ。そしてチェーチリア・バルトリやジョイス・デイドナートらの企画性も秀逸なヴォーカル・アルバム。さらには前述クルレンツィスやフィリップ・ヘレヴェッヘ、鈴木雅明らがストラヴィンスキーで聴かせる驚くべき新世界…。もちろんグザヴィエ・ロトも忘れてはいけない…。こうした豊かな創造の営みを耳にするたびに、アーノンクールが切り拓いた道の意味深さが実感されるのだ。上述の例は、多かれ少なかれ、その道を歩くことをためらわなかった演奏家だからこそ実現できたと言って過言ではない。聴き手もまた、これらの演奏を享受することで、アーノンクールの恩恵に浴しているのだ。

とはいえ未完に終わったベートーヴェンの新しい交響曲全集など、本人の不在もやはり惜しまれるところだが、ワーナーから巨匠の一周忌に合わせて、「エターナル・コレクション」第2弾として23タイトルもの録音がリイシューされるのは喜ばしい。第1弾同様、今回もリマスタリングはもちろん、歴史的録音の歴史的価値を蘇らせるべく、オリジナル・ジャケットと原盤解説(図版も含む)が可能な限り復元されている。また盤によっては現代の書き手が、現在の地点からアーノンクールを振り返る新稿を書き下ろしている(筆者も末席を務めさせていただいている)。さまざまなフォーマットで再発売されてきたアーノンクールの録音をお持ちの方も、あらためて「決定盤」として手元に置いておくにふさわしい内容だと思う。

タイトルは1960年代から90年代まで多岐にわたる。分類して紹介するならば、まずウィーン・コンツェントゥス・ムジクス(CMW)とのモンテヴェルディ、テレマン、J.S.バッハ、ヘンデルというバロック四巨匠の録音。モンテヴェルディ《聖母マリアのタベの祈り》は新旧録音共に復活だし、J.S.バッハは新録音の陰に隠れがちだった《ブランデンブルク協奏曲》《管弦楽組曲》の記念碑的回録音がその歴史的意義と価値を新たに問う。シュタストニーとの『バッハ：フルート・ソナタ集』や、レオンハルトと組んだ『バッハの息子たちの複協奏曲集』の久々の復活にも注目だ。ヘンデルは1970年代後半からの成熟したCMWによる、ヘンデルの印象を一新させた合奏協奏曲やオラトリオが蘇るし、幅広い年代にわたって録音され続けたテレマン作品も、その価値の再認識を促した名演ぞろい。また、ビーバーやゼレンカ作品集、『マンハイム宮廷の音楽』『マリア・テレジア王朝のウィーン音楽』など、アーノンクールとCMWが文字通り蘇らせた、「彼らの音楽」の数々が復活するのも嬉しい。

古典派以降に目を向ければ今回目立つのはモーツァルト。CMWとロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団を使い分けた、企画性の光る録音が復活する。フリードリヒ・グルダ&チック・コリアとの歴史的共演もある!そしてロマン派ではヨーロッパ室内管弦楽団との陰影豊かなメンデルスゾーン。

振り返れば世界はいよいよ混沌とし、「クラシック音楽」を金科玉条のごとく神聖化する行為はますます先のない袋小路のように感じられる。過去を見直し現代を問い、「クラシック音楽」が本来持っていたさまざまな他ジャンルとの回路を蘇らせ、それぞれの楽曲の背後の社会性まで聴き手に意識させてくれるアーノンクールの演奏の意義はますます大きくなっている。この録音たちは、「アーノンクール後の世界」を生きるための、必携のテキストなのだ。